

講義年月日 2007年10月15日

講演者 山口 喜一郎氏（創価大学図書館事務長）

テーマ 創価大学図書館改善の歩み

1. 改善動機・外的環境の時代変化

この10年、大学図書館には、業務やサービス対応等について大きな環境の変化が押し寄せた。

- ・ 認証評価対応 改革に大学首脳が理解を示し、図書館予算を認める
- ・ 国税庁査察（2年前） 図書館会計システムと大学財務システムの密接化
- ・ 文字活字文化振興法の制定 全学読書運動へ（2004～）

2. ピンチがチャンス

- ・ 新CAT対応 図書館システムを大幅リニューアルすることができた。
- ・ 財政緊縮 アウトソーシングを拡大できた。（大学職員数260名 180名に）
- ・ 競争入札 大型改修事業の実現（ガイダンスルームができた）
- ・ 国立大学独立法人化 国立大と私大の競合がサービス改善につながった。

3. バックログまたはボトルネック（これらの復旧にはおよそ2年を要した）

- ・ 滞貨図書 およそ20万冊が手付かず
- ・ 規程不備 滞貨図書の廃棄規程がなかった。
- ・ 研究図書の図書館業務からの切り離し 規程化をはかり、研究図書は消耗品扱いとした。

「3つの壁」 物理的な壁（滞貨図書、不要備品、施設等の制約）
制度の壁（規程がないので作業に取り組めない）
心の壁（図書館員の長年の経験等が足かせとなる）

4. これまで何を改革・改善してきたか

- ・ 250項目にも及ぶ改善点があったが、2001年から2007年3月までに毎年約30項目以上を改善。2007年9月現在までにおよそ180項目に達した。
- ・ 組織改革 改善にあたり、一番に着手。
2部・4課・6係を1部1課2係に
- ・ 人件費削減
アウトソーシング費を生み出すため、図書館の職員を29名 15名に。
これにより、新刊図書受入が早くなったなどのメリットがあった
- ・ 運営の一極集中
すべての運営を中央図書館に集中させた。短大図書館も中央図書館の傘下に。
- ・ 業務の改善（閲覧部門）
カウンター対応を合理化し、ほとんど全てをシステム化した。（レシートプリンタを多用）
- ・ 業務の改善（図書・雑誌・支払部門）
図書購入依頼 即発注データとなるようシステムを利用者対応にフェーズを合わせた。

見計制度を導入。発注から 10 日ほどで新刊が並ぶ。

予算管理および大学財務データとの照合システムを開発し、2 週間ほどかかっていた処理が 3,4 日で処理できるようになった。

電子原簿方式を定着化。会計監査が簡便に。

教員にアンケートを実施し 7 割の支持を得たため、雑誌購読形態を電子ジャーナル中心とした。(2008 年から開始)。

5. 何が大変でどの程度時間・負荷がかかったか

- ・ サービス面 46 種類ものカラーリーフレット等の作成。
- ・ 制度改善 利用対象者の拡大。八王子市民のみの利用から 1 都 4 県まで利用を拡大した。
- ・ 活動面 全学読書運動の展開 (およそ 3000 名が参加)
学生図書委員会の実施 (自治会クラブや寮の代表を集めて開催)
- ・ 電子図書館対応 携帯電話サービスを図書館システムと切り離す。T I S 社に依頼

6. 改革が図書館の質的变化をもたらした

- ・ 学習図書館機能と研究図書館機能が様々なサービスを適切化することでクリアになった。
- ・ 改善がスピードアップ 意思決定の速度がアップ。
- ・ 保存館・貸本屋的存在から学習・研究支援センターへ。

7. もし改革しなかったら

- ・ 利用者の要望に応えられていない
- ・ 図書館員の不満、ストレスがたまっていた
- ・ 滞貨図書が片付かなかった

8. 利用者はどのように反応したか

- ・ 利用者アンケートの実施 図書館員のサービス姿勢を問われるものなどが多かった。小さな改善から実施。

9. 今後何を改善したいか

- ・ 蔵書構築 (Web 上のコンテンツも視野に入れる)
- ・ 電子図書館機能の更なる拡張
- ・ 機関リポジトリの構築 他

いずれも達成させるには、チームワークを重んじ、図書館以外の教職員・組織との協同が必要である。